

- ・卒業年度：平成 15 年度（3 期生）青木一夫先生
- ・進学先の大学：立命館大学 国際関係学部 国際インスティテュート/American University School of International Service

1. 国際協力に興味を抱いたきっかけ

皆さん、はじめまして。平成 15 年度に卒業した長野西高校国際教養科 3 期生の市野紗登美と申します。

現在、国連人口基金(UNFPA)ウクライナに、国連ボランティア、Specialist on Local Development and Reproductive Health(地方開発とリプロダクティブヘルスの専門家)として派遣されております。

現在、私がかねてより目標としてきた国連で働くことができているのも、長野西高校国際教養科での学びがあったからこのことです。ですので、今回の卒業生だよりでは、このお便りを読んでくださっている皆さんに、長野西高校国際教養科の魅力をもっとお伝えできれば、と思っています。少し長くなってしまいかもしませんが、ご興味のある皆さんに読んでいただけると嬉しいです。

私が国際問題に興味を持つことになったきっかけ、それは、1998 年、自身が小学校 6 年の時に経験した、長野オリンピックでした。当時、一校一国運動という、長野市内の小中学校ごとに、長野五輪に参加する国が一国ずつ割り振られ、その国について調べたり、実際に選手の方たちと交流イベントを行ったりするという取り組みがありました。私の小学校の交流相手国は何とウクライナ(これは後述しますが、今の仕事とは全くの無関係です)。そして、何とも幸運なことに、小学校の代表として、長野五輪の開会式に「雪ん子」として参加する機会を得たのです。「雪ん子」として参加した開会式では、ピースアピールソングを歌い、ウクライナ選手団を先導し、最終聖火入場の際の伴走もさせていただくなど、本当に貴重な経験をさせていただいたのですが、その中で最も印象的であったのが、最終聖火ランナーの一人、クリス・ムーンさんとの出会いでした。

ムーン氏は、地雷撤去作業中に右手右足を失いますが、義足をつけてマラソンをすることで、平和をアピールする活動を行っていらっしゃる方です。当時の私にとって、地雷や戦争と言ったものは、テレビの中で、遠い世界のどこかで起こっていること…程度の認識しかありませんでしたが、その時に、ピースアピールソング「When children rule the world(邦題:明日こそ、子どもたちが…)」の歌詞を思い出したのです。

“歌おう この願い 争い、憎しみ、苦しみ、怒りも消え去るよう

いつの日出会える悲しみ乗り越えて 明日の世界を作るのは子どもたち”

世界中の人々が集まった五輪というイベント。でも、その瞬間にも、自分と同じ子どもたちが苦しんでいる…。その後、中学に進学し、ムーン氏の著書や、ウクライナのチェルノブイリ事故のことなどを勉強するにつれ、世界中に存在する問題のことを知り、中でも当時の自分と同じ、不平等に苦しむ子どもたちの存在に、強い関心を抱きました。こうした子どもたちの手助けをしたい、子どもたちが子どもたちらしくある世界を作りたい…そう思ったのが、国際問題に興味を持ったきっかけです。

中学時代は、図書館で国際問題に関わる本などを读んだりしながら、国連機関で働いてみたいという漠然とした思いはありましたが、同時に部活や生徒会活動にも力を入れました。当時は朗読が好きで、「アナウンサーになりたい」という気持ちもあったので、放送委員長になったりもしましたし、部活で吹奏楽部に入っていたので、音楽の道に進んでみたいという気持ちもありました。ただ、そのような中で、中学校英語弁論大会に参加することになり、そのテーマとして選んだのが、自身の雪ん子の経験と、国際問題についてでした。英語で自分の夢を文章にし、言葉にした時、「子どもたちのために働きたい、世界中で困っている人たちの手助けがしたい、国際機関で働きたい」という思いが一層強くなりました。

国際協力の道で働くとなれば、英語は必須ですし、広い視野を身に付ける必要があります。長野西高校の国際教養科は、当時まだできたばかりの学科でしたが、その評判はすこぶる高く、第二外国語やグローバルエデュケーションなど、英語科にはない、国際教養科ならではの特徴がいくつもありました。体験入学で実際に授業を受け、将来国際協力の道に進むためには、英語科ではなく、国際教養科しかない！そう実感した私は、推薦入試(今の制度での前期選抜)を希望しましたが、中学校内での選考で落ちてしまい、学校推薦はもらえませんでした。それでも、当時の私にとって、国際教養科以外で学ぶことなど考えられず、諦めきれなかったので、一般入試(今の制度での後期選抜)で受験することを決意。一般入試での入学枠は3名でしたが、何とか合格をいただくことができ、長野西高校国際教養科に入学することができたのです。



写真1：長野五輪開会式時にウクライナ選手団を先導した時の写真です。この時には自分がウクライナで働くことになることなど、予想もしていませんでした。

2.長野西高校国際教養科での学び

晴れて長野西高校国際教養科に入学し、実感したことは、国際教養科に入学出来て本当に良かったということでした。普通科に比べると英語の授業が多いのはもちろんですが、やはり何と言っても印象に残っているのは、国際教養科独自の科目です。

1 年次の英語理解のクラスでは、英語のルーツについて学んだり、教科書の暗記を行ったり、プレゼンテーションの基礎を学んだりしました。ただ英語の授業を受けるのではなく、英語を主体的に使う授業に、とても刺激を受けました。また、1 年次の英語合宿では、British Hills という、英国の生活を体験できる施設での合宿がありました。そこでの会話は基本的に英語で、外国人の講師による英語の授業や、英語での食事マナーのコース、料理やカリグラフィなどのアクティビティのクラスがあり、夜はクラスメイト達と英国風パブでダーツを試みたりと、海外での生活、英語を日常的に使う環境に、強く惹かれました。

2 年次からは授業の 3 分の 1 以上が英語を専門とする授業となり、第二外国語の履修も始まりました。第二外国語はフランス語を選択。これは、将来国際機関で働きたいと考えた時に、有利になると考えたからです。ユーモラスな先生の下、フランス語の会話だけでなく、フランスの文化や、海外における日本のイメージなどを学べたのはとても楽しかったです。

また、国際教養科専門科目は、実にユニークで、どれも強く印象に残っています。中でも、毎週自分の興味の持った事象について調べ、日英両言語で仕上げるレポートや、与えられた教材を、自分が教師になったつもりで解説するという授業、英語でのプレゼンテーション、ディベートなど、その内容は、大学で行うものに近かったのではないかと思います。また、中には自分が青年海外協力隊として派遣されたら、どのような活動ができるかを考える授業もありました。当時は、まさか自分が協力隊になるとは思っていませんでしたが、クラスメイトと一緒に、限られた環境の中で、様々な活動を思案してみたことも、自分自身が協力隊員になった時には役立ちました。

特に、英語を用いて、時事問題や国際問題について調べ、発表する授業というのは、何が今問題であるのか、それに対して何がされるべきであり、自分には何ができるのか、を考える姿勢が身に付き、これが高校卒業後も、常に自分の中で物事を考える姿勢として身に付きました。

ディベートやディスカッションなどは、その場の反応を見ながら英語で自分の意見を言わなくてはいけない難しさもありますが、相手の意見を聞きながら、自分の意見を英語で発信することは、今の仕事でも基本になっていることです。

それ以外にも、長野マラソンや、国際会議など、様々な国の方々の集まる場に行き交う機会があったり、英語で行われた講演会の通訳をしたり、海外から来た高校生のホームステイ受け入れをしたりするなど、通常の高校生活では味わえないような経験をいくつもさせてもらいました。その準備は大変な時もありましたが、当時はそのようなことが学べるのが嬉しくてたまりませんでした。

3 年次における進路選択で、私は大学に進学し、国際関係を学ぶことを希望していました。留学も考えましたが、「国際関係学部を基礎から英語で学ぶことはとても難しい」とのアドバイスがあり、立命館大学国際関係学部を第一志望としました。立命館大学の留学提携校が、私が学んでみたい大学であったためです。

最終的な進路決定に至るまでは紆余曲折あり、何度も壁にぶつかりましたが、担任の先生や進路指導の先生方の様々なアドバイスのおかげで、大学入試も無事に終えることができました。

3.大学での学び

立命館大学では、国際関係学、その中でも国際協力を専門としました。念願であった留学プログラムにも合格し、高校時代より目標としていた、ワシントン DC にあるアメリカン大学(American University, Washington, DC)に留学することが決定しました。このプログラムはとても画期的なプログラムで、双方の大学の規定の単位を取ることで、最短 4 年間で日米両方の大学の学位が取れるというもの。通常の人が 4 年かけて取る学位を、2 年ずつで取らなくてはいけないので、とてもハードなプログラムでしたが、既に高校時代に英語でのディベート、プレゼンテーション、レポート作成などの経験があったので、全くのゼロからのスタートにならなかったのは強みでした。アメリカでも国際関係学を専攻していたのですが、次第に国際問題の中でも、特にその問題が多く集まるアフリカ地域、そして、人々が生きるための基本となる、保健の問題に興味を抱くようになり、アメリカン大学の留学プログラムを利用し、アフリカ、ガーナへの短期留学(4 か月)も経験しました。ガーナでは国立ガーナ大学(University of Ghana, Legon)において、アフリカ地域における紛争、ガーナと奴隷貿易の歴史、そして途上国における公衆衛生を学びました。現地の病院でのインターンシップもさせていただき、途上国の現状を目の当たりにし、国際社会が共に取り組んでいかななくてはいけない多くの問題を実感しました。そして、途上国における実情をもっと知りたい、保健を通じて、子どもたちのために働きたいと考え、青年海外協力隊への参加を決意。無事に 4 年間で日米双方の大学の学位も取得することができ、大学卒業と同時に、青年海外協力隊、村落開発普及員として、マダガスカルに赴任しました。



写真 2 : ガーナ留学時代のインターンシップ先の病院にて。途上国の医療現場の実情を知り、「国際保健」の分野で働きたいと思うようになりました。



写真 3 : 留学を通じて、世界中に友人ができました。この友人たちも、皆世界中で活躍しています。



写真 4 : アメリカン大学の卒業式にて。日米 2 つの大学の学位を取得できた時の喜びは、とても大きかったです。

4. 青年海外協力隊への参加

青年海外協力隊としての私の役割は、地域住民の保健状態の向上でした。高校時代に協力隊の活動を考えてみる、という授業があったことは上にも書きましたが、それを実行に移すというのはそう簡単なことではありません。人々のモチベーションをいかに上げるか、効果や継続性…そういったものは、実際に現場に行ってみないと分からないことばかりだからです。ただ、現状を知り、それについて考え、何ができるかを思案する、という点で、行ったことは高校時代と変わりません。現状を見た上で、様々な試行錯誤をしてみる、そういった時に、必要になるのはアイデアの数です。中にはうまくいかなかったアイデアもありましたが、高校時代についた姿勢や、勢いもあり、とにかくあらゆる可能性にチャレンジしました。その中でうまくいったものの最たるものは、「手洗いソング」の作成でしょうか。

住民の保健状態の向上のために、普段私は乳幼児の体重測定や、主にお母さんを対象とした栄養指導、学校における衛生教育を行っていたのですが、マダガスカルでは予防可能な病気で亡くなってしまいう子どもがとて多く、その理由の一つが下痢性疾患です。正しい手洗いをすれば防げたはずの死…その防止には幼少期からの手洗いの習慣づけがとて重要なのですが、マダガスカルでは手洗いの習慣があまりありませんでした。そのような状況の中、学校での手洗い指導や、子どもたちとの遊びを通して、マダガスカルの子もたちが歌と踊りが大好きなことを実感していた私は、手洗い手順を歌詞にした歌を作り、それに振付をつけてみてはどうかと思いついたのです。

幸運にも、現地で著名な歌手の方がコラボして下さることになり、本格的な歌の作成、手洗いの手順を入れたダンスの考案、プロモーションビデオの作成など、最終的にはとて大きなプロジェクトになりました。私はこのプロモーションビデオが DVD に焼き上がったまさにその日に、マダガスカルを離任しなくてはならなかったのですが、その後もこの歌とダンスは、様々なイベントや TV スポットなどで使われているとのことと、とて嬉しく思っていますし、このような成果を残せたのも、高校時代に、あらゆる可能性にチャレンジする姿勢ができていたからだと感じています。



写真5：青年海外協力隊としてマダガスカルで活動していた時は、様々な活動を行いました。が、小学校での手洗い指導はとて力を入れた活動のうちの一つです。

5. 国連ボランティア参加、皆さんへのメッセージ

青年海外協力隊終了後は、国際機関の日本委員会でのインターンシップを経験していました。そんな折、国連ボランティアの選考が通り、ウクライナの国連人口基金への派遣が決定しました。国連は、私がかねてより目標としていた機関で、しかも、派遣先は国際問題に興味を持つきっかけともなったウクライナです。ウクライナに決まったのは全くの偶然でしたが、本当に驚きました。

国連ボランティアというのは、ボランティアリズムの発展と、それを通じた持続可能な開発のために設立された国連の機関で、各々のメンバーは主に国連機関に配属され、ボランティアとして活動します。国連ボランティアは、ボランティアという身分であっても、基本的には国連職員と同じ仕事を担当しており、私の場合、主に HIV 対策や、青少年の保健分野におけるプロジェクト作成補助をしています。

最後に、長くなってしまいましたが、長野西高等学校国際教養科の受験を考えている皆さんや、今現在長野西高等学校で学んでいる皆さんにお伝えしたいことは、「広い視野を持ち、何が問題であるかを知り、それに対して自分が何をできるか」と考える姿勢を身に付けること、「挫折をしても良いので、行動すること、諦めない気持ちの大切さ」です。私も皆さんに何かを伝えられるようなきちんとした人間ではありませんが、このお便りの読んでくださっている方の中にも、きっと、将来は英語を使ったり、海外に出たりして、色んなことをしてみたいと思っている皆さんもいらっしゃるのではないかと思います。

私は、大学 2 年次にアメリカに留学するまでは、海外旅行にすら行ったことのない人間でした。しかし、その後幸運にも、色々な国で色々な生活をし、数えきれない程の経験をさせていただくことができました。そこで感じたのは、この地球に住む人間として、今は国という単位を超え、地球に住む一人ひとりが自分自身と周りのことについて考え、共に行動しなくてはならない時にあるということです。

自分にできること、したいこと、そういったものは、簡単には見つからないかもしれませんが、それを叶えることも、決して容易ではなく、また、時にはうまくいかないこともあると思います。その上、他の人と協力して物事を進めるのは、更に難しくなるでしょう。でも、このお便りを読んでくださっている皆さんの中にある、行動したい、夢や気持ちと言うのは、どれも大切に、かけがえのないものなのです。例え失敗することがあっても、どんなに時間がかかることがあっても、どうか、今胸の中にある、その気持ちを大切にしてください。また、やりたいことや、何をしたら良いのかまだ分からない皆さんがいても、決して焦る必要はないと思います。きっと、それはこれから出会うたくさんの人々や出来事の中で、必ず見つかるでしょう。そのためにも、一日一日を大切に、していきたいですね。

一人ひとりの人が、一つでも多く夢を叶えられる世界の実現のために、私も精一杯頑張りますので、皆さんも一緒に、一歩ずつ、前に進んでいきましょう。



写真 6 : ウクライナの国連にて。
一人の人間として、自分にできることを精一杯やりたいと思います。